

受けた。このように見ると犠牲者、被害の程度というものは

- 一 震源の位置との関係；津波なので波の進行に直撃の位置にある地域は被害が大きい。ただし、海外など遠方からの津波は大きく日本をつつむことになる。地域の地形や沿岸形を深く認識していないといけない。
- 二 地震、津波来襲の時刻との関係；深夜、早朝、日没後などは被害とともに被害への対応が困難を来すので二次三次の被害を起こす可能性が大きい。住民への危機接近を周知するための最大限の方策が必要である。

- 三 被害伝承が時間が経つと弱まり薄まり、住民の危機感が弱まる。しかし、三陸を繰り返し襲っている現実から考えると「伝承」というよりは「地震後には津波が来るのは当たり前」ということが、教育や住民自治、危機管理行政においては徹底する必要がある。

- 四 避難場所については過去最大津波到達地以上の標高が必要である。明治大津波と昭和大海嘯の大被害を受けた岩手県の各自治体では世界最大防波堤を設置していた。しかし、今回の震災はその高さを超え、

しかも世界一の防波堤を木っ端微塵に打ち砕いた。たまたま、高速道路や国道バイパスが大津波を防ぐ堤防の役割を果たしたこともあった。やはり堤防設置と高台避難の組み合わせが必要だ。気仙沼市では大島が自然の大堤防と言えまいか。

- 五 最後は人間の判断による。家庭、個人でも集団組織でもその避難判断を下す中心的な人間が様々な情報を集め、いかに人命の避難行動をとるか、今回の震災を思うと数日間あるいは数週間の避難所運営も考慮することになる。

三 膾を吹く

「膾を吹く」とは「臆病になって、行動が大胆になる」ということだ。「膾を吹く」その目的は、命を救うこと、命を危険にさらさないことということだ。今まで挙げた二つの大津波の被害の教訓からの防災行動はまさにそこにあると考える。

「膾を吹く行動」をあげてみよう。

① 津波注意報を甘く見ない。

津波注意報は気象庁から警報基準が一メートル以下の津波とされている。しかし、一メートルの津波の恐ろしさは平成二十二年二月二十八日のチリ地震津波での気仙沼湾内の九十センチの津波の威力で私達は実感している。

海外震源津波も甘く見ないことだ。魚市場、魚町、南町の道路に冠水し養殖漁業に大被害を与えた。故に津波注意報でもその津波高の程度を避難の判断の基準とすべきである。現在一メートル程度の地盤沈下の現状を考える。一メートルは二メートル以上となる。注意報では海川に近づかないのは当然の鉄則だ。

また、津波警報でも今回の震災の場合「大船渡には六メートルの津波の予想」という報道があつて三陸沿岸の人たちの油断をさそつたとも思う。



2010年2月28日に発生したチリ地震津波による魚市場の冠水

予想の何倍ものことがある。

② 情報機器をいつも常備する。

地震など災害が起きたとき、いつも内容がラジオ、テレビそして携帯電話では報道されている。停電にもなる。今回の震災で携帯の不通は人々を困惑させた。であればラジオである。ラジオ離れがかなり進んでいるそう。デジタルの時代はすぐれた利便性をもたらすが電気があつたればこそそのツールである。**やはりアナログが効力を発揮する。ラジオは電池式か発電式のラジオが必要である。**しかも常に身につけておくべきだ。小さいものは単四一本で相当の時間受信できる。でもスイッチを切っていたら緊急情報は手に入らない。故に人命を預かる公所ではいつもラジオをつけていることが肝心である。うるさいかも知れない。そうであれば音量を低くしておけばよい。ワンセグの携帯テレビも有効化と思う。また携帯のメール機能やパソコンのソーシャルネットワークも有効だが、問題は電源である。特に多機能をもつスマートフォンは電源寿命が短いのが欠点だ。

③ いつも備蓄、いつも満タン、生理現象の準備

今回の震災後、命はありがたくも助かったが、食料の確保に多くの人は困難を極めた。健康な人なら一日くらいならなんとかなるが二日三日の飢えと渴きは恐ろしい結果に結びつく、今回の震災では直ちに食料と水の支援がもたらされたが、これが一日二日遅れていたらどうなっていたらう。なんと言ってもお年寄り子どもたちは災害弱者だ。ましてや病人にいたっては言に及ばない。福祉施設に入所していたお年寄りが寒さのために次々と命を落としていった聞いた。あの吹雪の夜のぬれた服装での極寒地獄は、言葉では尽くせぬものがある。食料、水、着替えの用意は常に必要である。では何日分かということになるが、一般的には日本で救助が到着する二日間と言われるが、南海トラフ震源の東南海地震を想定している**専門家は一週間の備蓄を提唱**している。多いにこしたことはない。余ったら分け与えればよい。でも個人宅での一週間の備蓄はスペースと交換やメンテナンスが必要である。地区ごとの共同備蓄など行政単位の知恵が必要

である。専門家は個人宅でも一週間分の備蓄と考えるとスペースの問題が出るが、備蓄しているものを普段的に使い回していくことで交換やメンテナンスは不要だと言っている。なるほどそうだ。

次に今回の震災で全く困ったのはガソリンである。ガソリンスタンドも今や電動であり停電では地下タンクにあるガソリンを車には入れられなかった。ご自分の車の満タン距離は何キロでしょうか。だいたい今の車は満タンで四百キロメートルから五百キロメートルは走行する。この距離は気仙沼市内を走るには一週間程度は可能である。だから「**いつも満タン**」を心がけたい。震災当時はよく言われた言葉だが徐々に忘れられている。それが証拠に土日には廉価のガソリンスタンドは混雑している。車にも膾を吹きたいものだ。当然定期点検もだ。

そして、生理現象である。大小便の処置もあるが、特に女性は大変だったようだ。ある学校ではあの夜、校舎内のトイレが使用不能になりスコップで穴を掘り、ブルーシート囲いをつくり男女別トイレを作ったそうだ。また、簡易トイレなど最近安く手に入る。しかし、使い方がわからないと

これまた宝の持ち腐れと言うことになる。経験が大きい。サバイバルな経験を家庭毎や行政が訓練の中でやってみることではないか。意外と身近なものも役立つことに気づくものである。訓練を繰り返すしかない。このような訓練活動は意外と学校を単位に行くと効果的である。家庭に浸透しやすいし、親も子も若い世代で継続が可能であり、当地方ではその地域世帯の相当程度の家庭が該当にもなる。課題は学校がこのような活動を積極的に受け入れるかどうかである。教育行政が果たす役割が大きいと思う。

④ 落ち合う場所は二カ所・・・いつも、津波てんでんこの発想を

今回の震災で就労者で犠牲になった方々の多くが、地震後きつと自宅、家族が心配で幹線道路を走行中に命を失ったのではなからうか。家族を思う当然の行為と思う。しかし、「津波てんでんこ」という岩手県を中心に広まった考えをもとにすれば、まず自分の命を守ることと家族や親戚は後回しということになる。まず自分の命を守ってから、次の行動に出ようというのである。今回の震災は全くその言葉の重みを実感させる出来事が多かった。しかしだ、家族を無視して自分だけということではできるものだら

うか。津波てんでんこの前に一つの条件が抜けている。「この大津波でも、自分の家族は〇〇に避難しているはずだから、心配だが、まずは自分が避難しよう。大切な家族は高台のあそこにいるはずだから。」この心配の中の安心が「津波てんでんこ」を実のあるものにしてくれると考える。しかし、今回の震災で避難場所自体に大津波が押し寄せた地区がたくさんあった。震災後、地区の避難所を高台に構えた地区は多い。想定外の津波という場合、もしくははその避難場所になんらかの理由で避難できなかった場合に、次のもつと高い安全な場所の避難場所を確認しておく必要がある。面瀬地区の場合、今回の震災では多くの地区民が面瀬中学校に避難し避難所として供されたが、平成二十四年十二月七日の津波警報発令の時にはたくさんの人達が基幹農道のアーバンメモリアルホール(海拔四十二メートル)に避難している。これは各地区や学校での「津波警報ではアーバンメモリアルホールに」という意識が形成されていた結果とも考える。つまり、避難する場所を何箇所か少なくとも二箇所決めておくことが、心配中の安心をつくりだし、まずは自分の命を守ることを第一に行動できるのではない

か。そういう意味でも是非、家族で第一次避難場所は〇〇、そうでないときは△△（第二次）へ必然、一次避難所よりは高いところ」ときめておくことが大切ではなからうか。これも膾を吹くと考えてください。家族げらげらに避難しても、いつかはあの場所で落ち合えろと考えるとすれば、災害時の小さいけれども行動の灯火となるはずだ。

⑤異地域との人的、物的応援体制の構築

今回の震災でも、今まで異地域との交流を進めていた市町村が大きな支援をいただいている。三陸は沿岸部なので県内や他県の山間地の市町村との交流や、はたまた東北なので九州、四国の市町村との交流など多様で必要なコンセプトと災害支援交流が考えられる。これらは行政が整えていくものである。このような相互緊急災害支援交流が事前にあることは、相互の支援が実に何の抵抗もなくスムーズに行われることが期待される。当然、交流地にいざ災害があればこちらから支援活動を行うのはあたりまえだ。